



# 大森六中だより

令和2年 1月

大田区立大森第六中学校

校長 松尾 廣文

TEL 3726-7155

## 朝礼講話「氷河の流れのように」

12月16日



United Nations  
Educational, Scientific and  
Cultural Organization

アフガニスタンで、医療や灌漑事業などの人道支援に取り組む NGO「ペシャワール会」の代表を務めていたのが中村哲さんです。

中村さんは、1984年にアフガンとの国境付近にあるパキスタンのペシャワールの病院にハンセン病の医師として赴任し、パキスタン人やアフガン難民のハンセン病治療を始めました。

その傍ら難民キャンプで一般診療に携わり、1989年よりアフガニスタン国内へ活動を拡げ、医療過疎地域でハンセン病や結核など貧困層に多い疾患の診療を開始しました。

病気の背景には慢性の食糧不足と栄養失調があることから、沙漠化した農地の回復が急務だと判断し、2000年からは、旱魃が厳しくなったアフガニスタンで飲料水・灌漑用井戸事業を始め、農村復興のため大がかりな水利事業に携わりました。

専門は、神経内科でしたが、現地では内科・外科もこなしていたといえます。

ペシャワール会とは1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成された福岡に本部をもつ国際 NGO 団体です。

ペシャワール会のHPに載っている中村さんの文書を読んでみます。

「氷河の流れのように (中村 哲)」

農村や下町に行けば、そこには殆ど昔と変わらぬ人々の生活がある。そして、

我々の活動も、これらの人々の涙や笑いと共にある。何世紀も営まれてきた人々の暮らしが、たかだか10年やそこいらのプロジェクトで変わるものではない。

しかも、俗にいう「進歩」や「発展」が本当にこの人々の幸せにつながるかどうか、私は疑問に思っている。

我々の歩みが人々と共にある「氷河の流れ」であることを、あえて願うものである。その歩みは静止しているかの如くのろいが、満身に冰雪を蓄え固めて、巨大な山々を確実に削り降ろしてゆく膨大なエネルギーの塊である。我々はあらゆる立場を超えて存在する人間の良心を集めて氷河となし、騒々しく現れては地表に消える小川を尻目に、確実に困難を打ち砕き、かつ何かを築いてゆく者でありたいと、心底願っている。

中村さんは12月4日朝、アフガン東部の都市ジャララバードの宿舎から、北東方向に25キロほど離れた灌漑用水の改修工事現場に向かいました。

その途中で乗っていた車が狙撃され、中村さんは右胸付近に被弾し、ジャララバードの病院に搬送され、手術を受けましたが、死亡しました。

中村さんの遺体の帰国には、日本のアフガニスタン人も「真の友人」として涙を流して出迎えました。

SDGsを身をもって具現化してきた中村さんに心より、哀悼の意と敬意を表して、朝礼を終わります。

# ユネスコスクール 加盟記念講演会

1月11日は六中のユネスコスクール加盟記念日です。ユネスコスクールに加盟して今年で9年になります。昨年、モロッコ王国よりララ・ハスナ王女をお迎えしたご縁で、今年は12月20日の6校時に、駐日モロッコ王国大使ラシャッド・ブフラル氏を講師にお招きして、モロッコ王国についての講演会をしていただきました。

始めにアメリカの大統領や日本の総理大臣との交流など、私たちがニュースの中でしか見ることのない方々との記念写真など、大使としてのお仕事を紹介して頂きました。さらに、アジアの端の日本が「日出ずる国」なら、アフリカ大陸の端のモロッコ王国は「日の沈む国」と紹介して、日本とモロッコ王国との共通点を話してくれました。王室と皇室、お茶の文化、室内では靴を脱ぐ習慣、温泉、鍋料理など驚くほど共通点が多く興味深いお話でした。また、時には「日本「作務衣」とモロッコの民族衣装「ジェラバ」を合わせるとスターウォーズの衣装になる。」などユーモアを交えながらお話してくれました。

その後、モロッコ大国の観光、政治、産業、交通等の話に移りました。モロッコ王国では再生可能エネルギーは42%で2030年には52%を目指しているなど、日本より進んだ取り組みについて話され、私たちも見習わなければならないと感じました。また、講演の中で六中の代表生徒から、「教育について。」「フードロスの取り組みについて。」「貧困をなくすには。」等の質問をしましたが、丁寧にお答えしてくれました。

最後に、六中生からは「六中 平和の歌」の合唱と「お礼の言葉」で講演をしてくれたお礼の気持ちを伝えました。



体育館で全校生徒と記念撮影

# 新春コンサート ～チームごとに工夫を重ねて～

1月16日（木）の放課後、特活室で、吹奏楽部による新春コンサートが行われました。

文化祭で3年生が引退し早2か月半が経ちました。昨年11月より、アンサンブルの取り組みを行合い、チームごとに工夫しながらの練習を積み重ねて本番を迎えました。曲目は、「3つの花」「IKEZUKI ～海を渡った馬の伝承～」「カントリー・ロード」「空も飛べるはず」の4曲。会場は満員！！とても素敵な時間をいただきました。19日（日）の東京都中学校アンサンブルコンテスト、25日（土）の大田区アンサンブル発表会でも頑張ってくださいね。



管打6重奏「3つの花」



管打7重奏「IKEZUKI～海を渡った馬の伝承～」



合奏「カントリー・ロード」



合奏「空も飛べるはず」

## 生徒会意見交流会

『12月25日午後、池上会館で、大田区立中学校全28校が一同に介し、第2回生徒代表者意見交流会が行われ、六中は役員全員が参加しました。交流会の今年のテーマは「あなたの学校・学区の①好きのところ②未来にも残しておきたいところ③変えていきたいところ④今後実現していきたいと思うこと」でした。このほかにも、生徒会が中心になって行っている、それぞれの学校の取り組みについても発表し合いました。その中でも、アルミ缶回収、テスト前に集まり勉強する学習サークル、集めたごみの重さをグループごとに競うゴミピックという活動に特に興味がわきました。今六中が行っている活動の強化になるもの、これからの六中に生かせるものなどプラスになるたくさんを知ったり、より良い学校生活のためのヒントを与えてもらったりできました。また、普段地域についてあまり詳しく見ようとしなかったことに気づき、とても新鮮な感じがしました。これからの生徒会活動にさらなる意欲が湧きました。』

生徒会長 佐藤 光

# 持続可能な社会の担い手づくり

大森第六中学校研修ユネスコ委員会

## 二学期の年納めは焼き芋



恒例の落ち葉はきの納め会は、焼き芋大会です。

焼き芋大会の事前準備が大変で、そのまま焼いてもおいしくはなりません。地域支援本部、保護者の方々があらかじめサツマイモ、くるむための新聞紙、くるめた芋をぬらすためのボール、さらにくるむためのアルミホイルを生徒が作業しやすいように準備してくれます。おかげで昼休みの15分間でミニボランティア50人ほどで500本の芋が焼くばかりの姿になります。



さらに、本校の主事さんは、芋がよく焼けるようにその日の午前中から櫓を組んで大きなたき火の準備をします。なかなかできないことです。全校の先生や主事さん、地域の方、保護者の方が協力してできた焼き芋は本当においしい。きっと売っている焼き芋よりおいしいです。



## なぜ、焼き芋大会？

焼き芋大会は本校がとても大切にしている活動です。以前は、36本の落葉樹サクラの落ち葉は主事さんが朝から1日かけて掃いて捨てる本校の校庭は、主事さん泣かせの校庭で有名でした。校庭が3つに分かれ、春見事に咲かせるサクラはあつという間に散り、落ち葉の量は他校と比べものにならない。そこで、少しでも負担を減らすことができないか、ゴミとして出していた落ち葉を何かに使うことができないか、と考えたのが、「ミミズコンポスト」です。農援隊が協力して、枠をつくり、その中に落ち葉と六中産ミミズを大量に採って入れたのが最初です。次の年の夏にはコンポストの底の方に腐葉土ができ、その腐葉土を使ってゴーヤグリーンカーテンを設置しました。グリーンカーテンを設置することで、内側と外側の温度差は2、3度ですが、多少温度が低くなることから空調の温度設定が高くて済みます。最初のグリーンカーテン設置は、東日本大震災により節電を余儀なくされた年でもあり、多少なりとも貢献できました。落ち葉でたき火をすることは、「カーボンニュートラル」の取組ともいえます。サクラの木が光合成で二酸化炭素を吸収し、それを燃やすことで放出された二酸化炭素は量的に増やしたわけではないことを生徒には理解させています。(ただ、温暖化防止活動では脱炭素を目標にしていますが。)



さらに、食にこだわり、ゴーヤ、焼き芋、など食材を身近に扱うことで地産地消、食の大切さを知ってもらう機会にしています。

すべては、地球的課題解決を目指す本校の取組につながり、意識して地域や、学校全体で生徒と共に考える機会を増やしています。

